

その他

特色GPシンポジウム「学士課程教育と一年次教育の役割」

はじめに

2009年1月30日(金)、玉川大学コア・FYE教育センター主催の特色GPシンポジウム「学士課程教育と一年次教育」が開催され、100名以上の参加者があった。中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008年12月24日)のなかでも、初年次教育の問題が取りあげられただけに、関心も高く、意義あるシンポジウムであった。

弘前大学でも、初年次教育として「基礎ゼミナール」を重視し、FDワークショップで数回にわたって取り組んだだけに、共通する問題が多く含まれた。参加者の立場から、弘前大学におけるFD活動との関連から、そのいくつかを、以下に簡単に報告する。

特色GPシンポジウム
「学士課程教育と一年次教育の役割」

タイムスケジュール	開催概要
<p>1. 基調講演 (60分) 「一年次教育と学士課程教育の構築」 神戸大学大学院教育推進機構 教授 川嶋 太郎氏</p> <p>2. 報告 (30分) 「一年次教育から移行教育へ」 玉川大学コア・FYE教育センター センター長 経営学経済情報学系学長 松本 茂氏</p> <p>3. 事例報告 (90分) 事例報告 1 (30分) 「居場所」としてのキャンパスを作る -初年次の学生に大学は何を提供できるか- 慶応義塾大学教育センター 所長 法学部教授 横山 千恵氏</p> <p>事例報告 2 (30分) 「立教大学における初年次教育の取組」 立教大学大学院院長・支援センター副センター長 経営学経済情報学系学長 松本 茂氏</p> <p>事例報告 3 (30分) 「授業で身につく」10の威力」 -新たなキャリア教育の試み- 東京女子大学キャリア開発部長 国際教育学部国際教育学科助教授 加藤 千穂氏</p> <p>4. 質疑応答 (20分)</p> <p>5. 総括 (15分) 神戸大学大学院教育推進機構 教授 川嶋 太郎氏</p>	<p>開催日 平成 21年 1月 30日 (金) 12:30～ 受付開始 13:00～ (17:00終了予定)</p> <p>場 所 東京ステーションコンファレンス 605A (サビアタワー6階)</p> <p>定 員 100名 *先着順 100名までとさせていただきます。</p> <div style="text-align: center;">  <p>First Year Experience</p> </div> <p>玉川大学コア・FYE 教育センター 東京都目黒区玉川学園 6-1-1 Tel: 042-739-8856 Fax: 042-739-8867 E-mail: core-fye@tamagawa.ac.jp</p>

一年次教育と学士課程教育の構築

主催側の玉川大学学長・小原芳明の開催挨拶に続いて、神戸大学・大学教育推進教育機構・川嶋太郎氏の基調講演「一年次教育と学士課程教育の構築」があった。タイトルからもわかるように、同『答申』を踏まえた示唆に富む報告であった。冒頭、知識基盤社会の到来で、「知識」観に変化が見られ、「何を知っているか」の「知識」から、「習得した知識で何が出来るか」の「能力」へと移行し、「学習の総合・統合」が重要であるとの指摘があった。日本は、他のOECD諸国との比較調査から見れば、大学全入(と大学全卒)時代として、「退学率」が最も低いことが紹介された。しかし、これは果たして優れた教育成果を意味するののかとの問題提起がなされ、表面的な数値ではなく、何が習得されたかの学習成果(ラーニング・アウトカム)が重要であると指摘された。環境変化と求められる大学改革に関して、1) 大学ミッション、育成する人材像、習得させる学習成果の明確化、2) 学習成果の適切なアセスメントと改善への組織的取組、3) 学生参加、学生中心の教育実践、4) 教育成果を可視化する仕組、5) 履修支援システムの充実、

6) 国際的に通用する教育体制、などが重要であると報告された。このような環境の変化は、「教育パラダイムから学習パラダイム / 教員中心から学生中心へ」を促し、「教員が内容をどれだけ教えたのか」から、「学生がどれだけ学んだのか、何ができるようになったか」が重視されるようになったとの説明があった。

初年次教育の定義づけでは、「高校からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を『成功』させるべく、主に大学新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」(濱名・川嶋編『初年次教育：歴史・理論・実践と世界の動向』丸善、2006年)と説明した。文科省の平成18年度のデータによれば、初年次教育の現状は、501大学(約71%)で実施されている。文科省は、初年次教育を「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新生に最初に提供されることが強く意識されたもの」と説明している。しかし、そこでの取組は多岐にわたり、多くの大学で「基礎学力の補完を目的とする補習教育」のリメディアル的なものが現状である。筆者も、弘前大学21世紀教育(教養教育)で1・2年次を対象にテーマ科目の授業を担当しているが、初年次教育として「基礎ゼミナール」が提供されているにもかかわらず、大学教育への円滑な移行が機能していない。すなわち、大学教育への「学びの転換」が不十分である。その証拠に、多くの学生は、未だに自らを「生徒」と呼び、「学生」と「生徒」の区別がつかず、高校までの受身の授業から脱皮できず、大学もアクティブ・ラーニング体制になっていない。

そのうえで、学士課程教育における初年次教育の意義が強調され、教育改革の「起爆剤」として、FDによる「仕掛け」が必要であることが指摘された。弘前大学21世紀教育センターにおけるFDワークショップでも、同じような認識から「基礎ゼミナール」担当者によるワークショップを実施してきた。新たなキーワードとして、“Engagement”、“Learning”、“Active Learning”が用いられている現状からも、「教員中心の教育」から「学生中心の学習」へのパラダイムの転換が顕著であるとの指摘があった。

能動的学習(Active Learning)は、アメリカでは決して新しい動向ではないが、日本では学士課程教育や初年次教育に関連して、その重要性が目立つようになった。とくに、学生の記憶の維持率を図式化した「学習ピラミッド」(Learning Pyramid)を、「ペダゴギー改革」と位置づけていたことが印象的であった。また、能動的学習の有効性に関する外国文献の紹介もあった。たとえば、1)何を聞いたかでは、すぐに忘れる。2)何を聞き、見たかでは、少し覚えている。3)何を聞き、見て、質問し、他の学生と討論したかで、理解できるようになる。4)何を聞き、見て、討論して、実践したかで、知識や技能を獲得できる。5)何を学んだかを、他者に教えることで、はじめてマスターできるようになる。また、エリート段階の学生とユニバーサル段階の学生を比較した図表を用いて、能動的学習の有効性の説明があった。すなわち、前者には高度な知的活動・能力(理論化できる、応用できる、関連付けられる、説明できる、記述できる、記録できる、記憶できる)があるが、後者は「低度の知的活動・能力」であるために、「能動的な学習活動」が有効との説明であった。日本の現状大学のような「すし詰め」の授業形態では、アメリカのような能動的学習の実践が難しいことも指摘もあった。

最後に、アウトカムズを重視した初年次教育の問題が提起され、とくに、学習成果をどのように測定するか(アセスメント)の重要性が強調された。これに関連して、筆者の授業でも学習成果を省察させた「ラーニング・ポートフォリオ」を作成させ、学生の成果を測定するための評価基準として独自のルーブリックを用いていることとも共通した。

一年次教育から移行教育へ

主催者側の玉川大学コア・FYE教育センター長・菊池重雄による報告があった。玉川大学は、この取組で特色GPに採択されただけに、一年次教育(初年次教育)の充実したプログラムを提供している。たとえば、全学部入学生を対象とした30名定員の一年次教育プログラムは、1)春学期:「一年次セミナー

101（2単位）」必修、2）秋学期：「一年次セミナー102（2単位）必修、となっている。このプログラムの目的については、1）学生が自覚をもって大学生活を送り、自律した社会人なることを支援するプログラムと位置づけている。到達目標（学生はなにができるようになるか）として、①大学生として学問の重要性が理解できる。②成功に必要な規則正しい計画的な学習習慣・技術を身につける。③卒業後の将来設計をたてることができる。④大人としての健全な生活習慣を身につけることができるようになる。そして、この到達目標を達成するための3つのスキルとして、①アカデミック・スキル（一年次セミナー101）、②スチューデント・スキル（一年次セミナー102）、③ソーシャル・スキル（一年次セミナー102）をあげた。

二年次セミナーの問題点が紹介された。これは、欧米諸国の大学でも見られる「大学二年次のスランプ（The “Sophomore Slump”）に相当する現象で、大学の学問に対する疑問と不安の「悩み」を象徴したもので、Academic Twilight Zoneとも称されているという。報告を聞きながら、“Sophomore”の語源が脳裏をよぎった。これは、ギリシャ語の *sophós*（賢明な）+ *mōros*（愚かな）から生まれた言葉で、もともと、学生の複雑な成長過程を表したもので、二年次スランプとの表現は興味あるものである。

『居場所』としてのキャンパスを作る—初年次の学生に大学は何を提供できるか

慶應義塾大学教養研究センター所長・横山千晶の事例報告は、タイトルが示すように楽しい報告であった。学生たちがキャンパスを、1）クラス、図書館、ITセンター → ハードとしての学習環境、2）部活動や「溜まり場」 → 課外活動、3）キャンパス近くのカフェ、お店 → 地域コミュニティ、4）アルバイト先、ボランティア活動 → 社会、インターンシップ、5）インターネット、携帯電話 → ヴァーチャル・リアルティ、遠隔授業、自立学習、と興味深くとらえている。これらの「居場所」をつなぐものとして、1）内部として、①学習環境をつなげる、②課外活動と授業をつなげる。2）外部として、①地域コミュニティと大学をつなげる、②社会と大学が連携する。3）ITとして、①授業以外の時間と場所につながる、などをあげた。

とくに、印象的であったのは、図書館についてのものであった。たとえば、学生の学習環境、生活環境が変化しているにもかかわらず、図書館に対する概念が学生も教員もさほど変わっていない現状を指摘し、「図書館こそ、『学び』と『生活』のインター・キャンパスとしての『居場所』となるべき！」と提唱した。すなわち、大学生活の中心として図書館を位置づけ、そこでは、1）ディスカッション・スペース、2）飲食コーナー、3）サイレント・スペースとの区別化、4）ゆったり快適に本を読める空間と設備、5）時間の問題（週末や夜間）、6）さまざまな「文献（まんがを含む）」の確保が重要であると提言した。さらに、図書館にピア・メンターリング制度やCenter for Learning and Teachingの機能と図書館独自の学習コースの必要性をあげた。報告を聞きながら、カナダ・ダルハウジー大学学習・教育センターでの取組を思い浮かべ共感した（詳細については、弘前大学生涯学習教育研究センター On-Line 公開講座「弘前大学における教育～最近のトピック～」の「授業改善への取組み～いま、日本の大学で何が求められているか～」および「大学教育と大学図書館～大学改革は図書館から～」を参照）。

（文責 土持ゲーリー法一）